

7月30日 書くということ

口語と文語。古典の習い始めには、たいていこの二つの違いを説明される。口語は話し言葉。文語は書き言葉。話し言葉は時間とともに変化する。それは形がないからで、書き言葉は文字という形で記録される。だから千年以上も前の人たちの考えを、今知ることができる。

明治時代の言文一致運動以降、口語と文語の垣根はなくなった。しかし、勘違いしてはならないのは、“話し言葉”と“書き言葉”は、今においてもやはり違うということだ。“話し言葉”が原則として“時間”や“場”を共有している者の中で成立するのに対して、“書き言葉”はそれらを共有しない相手との間で成立する。

ツイッターなどに代表される SNS を利用すると、いとも簡単に自分の“思い”を全世界に発信できる。しかし、発信した途端に“呟き (tweet)”は“書き言葉”に変わるということを、私たちは忘れてはならない。必要なのは“時間”と“場”を共有していない相手にも誤解されないよう、言葉を選びながら丁寧に書くという作法だ。

心ない誹謗中傷を受け、前途ある若者が自ら命を絶った。自分の書き込みがその人を死に追いやったと、多くの人が悔やんでいる、中にはカウンセリングを受けている人もいる、先日、そんな記事を読んだ。“呟き”は独り言。自分という世界の中では、傷つけたとしても自分以外に広がることはない。しかし、“書く”という行為を伴った途端、“呟き”は責任とモラルを問われる“他者との世界を構築する言語”に変わる。

